



第21回鹿児島県国保地域医療学会

特集

special feature

# 地域医療における 連携の現状

## ～加速する高齢化社会～

鹿児島県市町村自治会館で平成25年11月23日、鹿児島県国保地域医療学会が開催され、国保診療施設に勤務する医師や看護師、市町村国保の関係者ら約120人が出席した。「地域医療における連携の現状～加速する高齢化社会～」をメインテーマに、研究発表やパネルディスカッション、特別講演があり活発な意見交換が行われた。



「地域医療における連携の現状」と題し行われたパネルディスカッション。それぞれの立場から地域における連携の在り方について発表した4人のパネラー（上段左から田中看護師長、坂上室長、田中係長、新村所長）と進行を務めた佐々木院長（下段左）。助言者に迎えたのは、中村看護部長（下段中央）と濱畑所長（下段右）

はじめに主催者を代表して鹿児島県国民健康保険診療施設協議会の川添健会長が、「今年8月、社会保障制度改革推進法第4条の規定に基づく「法制上の措置」の骨子について閣議決定され、社会保障制度改革の全体像及び進め方について、策定等が行われている。その中には、医療従事者、医療施設等の確保及び有効活用等を図り、効率的で質の高い医療提供体制の構築や、地域包括ケアシステムの構築など、国保診療施設として重要視しなければならない施策等が盛り込まれており、本協議会においても、医師を始めとする医療従事者

**地域住民の健康と生命を守る医療施設として存在意義を高める**



「改革」の動きを注視していかなければならないとあいさつで述べる川添会長



来賓あいさつを述べる県保健福祉部の松田部長

等の確保、施設運営の健全化など、多くの課題を抱えており、今後とも「改革」の動きを注視していかねければならない」とあいさつし、来年の5月16日・17日に第28回地域医療現地研究会が奄美市及び瀬戸内町にて開催されるにあたり、多くの方に参加してほしいと続けた。

また、来賓あいさつで鹿児島県保健福祉部の松田典久部長が「国保診療施設は、地域住民に対する医療の提供や、健康の保持増進への寄与という重要な役割を担っている。県としても、「ドクターバンクかごしま」、あるいは、自治医科大生、鹿児島大学の地域枠の学生の確保などによる医師の確保や、国庫助成制度等を活用した診療施設運営の支援に取り組んでいる。また、国民健康保険制度については、大

引き続き「異常気象と地球温暖化について」と題し、鹿児島テレビ放送株式会社の新井雅則気象予報士が特別講演を行った。

新井氏は、昨今の異常気象について「気象庁では『異常気象は30年に1度発生するかしらないか』と定義されている。約30年という長さは日本だけでなく、世界気象機関でも異常気象の目安となっている」と異常気象の定義について説明した。

### 昨今の異常気象と地球温暖化

な変革期を迎えつつある。県としては、今後とも、国における議論の動向等を注視するとともに、国民健康保険制度が将来にわたって持続可能な制度となるよう、全国知事会等と連携しながら、地方の現場の意見をきちんと主張し、それを理解していただいた上で、制度を創設していただくように努力してまいりたい」と述べた。

あいさつの後行われた研究発表では、臨床・検査・事務部門の座長に公立種子島病院の野口靖彦院長を迎え4席の発表が行われた。また、看護・保健部門の座長には枕崎市立病院の川上百合子総看護師長を迎え3席の発表が行われた。

## 研究発表

### 臨床・検査・事務

座長  
公立種子島病院  
院長 野口 靖彦



南大隅町立郡・大泊へき地出張診療所における個別栄養指導の実際

南大隅町立郡へき地出張診療所  
所長 上村 英里



看護師に対する放射線理解度調査をおこなって

枕崎市立病院  
放射線技師 久保 陽介



鹿児島県十島村でのヘリ搬送44例の検討

鹿児島赤十字病院  
医師 石橋 和久



へき地において、自分にできる連携

奄美市住用国民健康保険診療所  
所長 野崎 義弘

### 看護・保健

座長  
枕崎市立病院  
総看護師長 川上 百合子



PEG患者の口腔ケア  
～必要性と細菌の発生状況について～

南さつま市立坊津病院  
看護師 長濱 和尚



豪雨災害を経験して  
～改めて考える地域連携の大切さ～

瀬戸内町へき地診療所  
看護師 祝 朋乃



濃厚流動食の粘稠度を寒天でつける事での便の性状改善への試み

枕崎市立病院  
看護師 中村 真之介

また、地球温暖化が異常気象の発生原因なのではないかと言われていることについては、明確な相関関係が見つけられていないため断言されてはいないと続けた。

その後も、異常気象がもたらす災害や地球温暖化による気候の変化などについて講演が続き、出席者は今後の災害に対し常に注意を払っていく必要があることを考えながら興味深く聞き入った。

**ますます求められる  
緊密な連携**

続けて行われたパネルディスカッションでは、枕崎市立病院の佐々木健院長が司会を務め、助言者に長島町国民健康保険鷹巣診療所の濱畑弘記所長と医療法人博康会なかむら内科病院の中村育美看護部長を迎え、「地域医療における連携の現状」をテーマに4人のパネラーが各々の立場から発言し、活発な議論が交わされた。

その後、事務局と看護部門に分かれ分科会が行われた。看護部門ではパネルディスカッションで助言者を務めた中村看護部長が「ナラティブの理解を深め、看護実践に生かす」と題し講演を行った。閉会にあたり本協議会の薩摩川内市里診療所の鈴木済所長があいさつし閉会した。

ますます高齢化が進む中、地域医療の連携は必要不可欠。それぞれが知恵を出し合いながら連携し、自立した生活ができる環境づくりを進めていくことが求められているのではないか。

また、高齢化が進む中、地域医療の連携は必要不可欠。それぞれが知恵を出し合いながら連携し、自立した生活ができる環境づくりを進めていくことが求められているのではないか。



異常気象と地球温暖化について講演する新井気象予報士

パネルディスカッション

テーマ「地域医療における連携の現状 ～加速する高齢者社会～」



「鷹巣診療所における僻地・離島及び在宅医療への取組」

長島町国民健康保険鷹巣診療所 看護部長 田中 隆子

在宅医療や介護、福祉の在り方、連携の現状については、新たな在宅支援事業所との連携が始まり、退院前にカンファレンスを開いたり、在宅患者様の介護相談を受けたりすることで、顔の見える連携を取っている。そして、より患者・家族が満足されるように支援センターなどと連携を取りながら、在宅医療と最終的にはQOD（クオリティーオブデス）＝満足できる死を迎えていただくための在宅死を目標として働きかけをしていきたい。

「枕崎市地域包括ケアシステム構築に向けた取組」

枕崎市健康課健康促進係 係長 田中 義文

平成25年4月1日に地域包括ケアシステム推進委員会を立ち上げ、目的・理念に①住民が健康で長生きできる環境整備②住民福祉のサービス向上を図ることを掲げた。そして、5つのテーマで会議が行われ、地域包括ケアシステムの構築に向けては、市民に公平なサービスを提供するために地域包括ケアの推進役は行政が担うべきであると、さらに一体化したサービスを提供するために、行政は横の組織の連携を密にする必要があるとまとめた。



「高齢過疎化が進む地域における在宅医療推進に向けた取り組み」

肝属部医師会立病院地域医療室 室長 坂上 陽一

高齢、過疎及び人材不足が進む中で地域医療崩壊が懸念される。都市部とは異なり「人」も「資源」も限られた中で、「地域包括ケアシステム」の構築が急務の課題である。地域包括ケアシステムは、医師会の理解、協力がなければ市町村主体で取り組むことが難しいことを実感した。人材、資源が乏しく高齢化が進行する地域だが、在宅を望んだ時に支える体制作りを実現する為に関係機関を巻き込むことで解決出来ることを実感した。

「地域医療における連携 ～訪問看護ステーションの現状～」

鹿児島県看護協会訪問看護ステーションがこしま 所長 新村 加代子

超高齢社会に向けて切れ目のない包括ケアサービスが提唱され、医療・介護・福祉の連携が深まってきている。訪問看護においても複合型サービスや連携型サービス、また外泊中の訪問看護が制度化されサービスも多様化してきている。中・重度者の在宅療養やターミナル期の療養者に対して、訪問看護の役割を發揮し、また高齢社会に向けての課題に対し、施設やグループホーム等とも連携し利用者支援に関わっていきたい。

# 町民目線で町民のために 健康づくりを推進していききたい

南種子町地域包括支援センター 保健師

浮田 恵

## 一丸となって取り組む 受診率向上

南種子町には保健師が3人、看護師が1人います。そのうち地域包括支援センターに2人、健康増進係に保健師1人、看護師1人が配置されています。

南種子町国民健康保険においては、専属の保健師が配置されていないため、健康増進係と地域包括支援センターが特定健診や特定保健指導、運動教室などを実施し、訪問の報告や課題の共有など連携した業務を行っています。平成20年度から始まった特定健診・特定保健指導の受診率向上という課題は避



運動指導士による有酸素運動教室

けては通れない道であり、最終年度においては保健福祉課が一丸となって、職員二人ひとりがそれぞれアイデアを出し合い受診率向上に努めました。

## ひまわり倶楽部の誕生

「女性パワーで笑顔の輪を咲かせよう」をテーマに町内のお母さんたちを対象にした「ひまわり倶楽部」が誕生しました。

本町では、特定健診に足を向けてくれるお父さん方が少なく、お母さんの一言で足を向けてくれるのでは？という発想から、年3回の学習会や運動教室を実施しました。

女性向けということで、乳がんを発症した方の体験談を聴いたり、財布に優しいジェネリック医薬品の普及を図るため、薬剤師による講演会の開催や運動指導士によ



オリジナルのシャツで健康づくりをPR

る有酸素運動教室など、様々な教室を開催しました。

「お父さん、一緒に健診に行こうよ！」と、健康であることでいつまでも笑い声が聞こえてくる、そんな家庭が増え続けてくれることを引き続き期待したいものです。

## 積み重ねた努力の結果から得られた達成感

南種子町の特定健診受診率は、制度開始の平成20年度から20%、30%代と4年間伸び悩み、保健師の配置されていない国保担当部署ではあらゆる検討をしてきましたが、最終的にたどり着いたのが電話による受診勧奨でした。



「健康が一番!」と、特定健診会場にも笑顔で血圧測定に向かう浮田保健師

第一期特定健康診査等実施計画では、最終目標受診率が65%と設定されておりましたが、過去4年間で1回しか受診しなかった方が約34%、2回受診が約25%という統計結果から、何とか65%を越えたいと看護師による連日の電話による受診勧奨作業が続きました。

「元気だから大丈夫!」、「自分の体は自分が一番知っている」などの声もあり、「本当に健康であることの大切さを理解してもらいたい。」と痛感させられました。一方、電話での反応は良いものの、実際に来てくれるの?と半信半疑のところもありましたが、平成24年度の法定



温泉プールを活用したアクアビクス運動教室

報告の作業を進める中、目標とする受診率65%には届きませんでした。が、小さな努力を積み重ねた結果、51.5%と前年度より20%近くアップしたことへの達成感は大きなものでした。

**健康づくりに期待するもの**

住民の中には一人ではなかなか表に出て活動をすることに慣れていない方も多く、国保の保健事業では、温泉プールでの「アクアビクス運動教室」や「ウォーキング大会」などを実施しています。

声を掛け合い、友達同士で参加することで次へのステップにもつな

がることから、これからの健康づくりへ期待したいものです。

「地域と一緒に・町民と一緒に楽しく健康づくりが出来たら・」と限られたスタッフで町民目線で町民のために健康づくりを推進していきたいと思えます。

## 南種子町メモ

南種子町は、大隅諸島の1つである種子島の南端に位置し、1543年ポルトガル船が最南端の門倉岬に漂着し、鉄砲伝来の地として歴史的な由来を持ち、現在は日本の科学技術の粋を集めた種子島宇宙センターがあることで、歴史と未来が共存する町です。平成25年10月末現在で人口6,062人、世帯数3,018世帯、高齢化率は31.7%、また年間出生数は50人前後と少子高齢な町です。

また、南種子町は観光の町としても有名で、種子島宇宙センターや門倉岬、千座の岩屋など鉄砲伝来と宇宙へはばたく町として飛躍しています。



献血と医療費について理解してもらおうと、中学生を対象に出張講座を開催